

# 村のはてしない広さ

大倉 宏

去 年(2013年)の秋、新潟大学旭町学術資料展示館で、昭和20年代に撮影されたという30点あまりの写真のプリントを見たとき、白黒の紙の中から野太い手が出て、私をつかんだ。そして地球につかまった月のように、それらから離れられなくなり、小さい展示室の壁の前をぐるぐる衛星のように回り始めていた。

閉ざされたその軌道に、無限の、宇宙の、広さを感じた。角田勝之助という未知の人が、福島県の只見川上流の山村金山町の一集落という未知の場所で、私の生まれていない未知の時に撮った写真に感じる、しみとおる既知の空気。かつて、私は、そこにいた。世界は、あのころ、今のようにせせこましくなく、人々は大きく、山の麓におおわ

れた土地は、はてがなかった。

思い出したのは1960年代半ば、新潟県新発田市の今は廃線となった赤谷線というローカル鉄道の終着駅から、さらに

バスで40分、溪谷沿いの道を上ったところにあった鉾山集落での2年あまりの日々のことである。全校28人の学校の教員となった母と弟との3人暮らし。やがてなじんていった集落の人々は、一人一人が違っていた。大きかった。誰にも<宇宙>があった。そのような宇宙たちが、浮かび、行き交う谷間は広大で、それは何かと自省し自問する力とすべを持たなかった私はその違い、大きさ、宇宙をただ感じとり、呼吸していた。その「感じ」、感覚、感情が、その「ただ」のまま、壁のモノクロームプリントにそっくり、存在し、広がっている。そのような世界、宇宙に浮かんでいた時間の幸福が、生き生きと、触れうるものとしてよみがえってきた。

当時20代だった角田のカメラを見返す男たち、女たち、子供たちは、知らない人々なのに、部屋を回りながら見つめていると誰もが知っている、とてもよく知っている、という気がしてくる。人を「知っている」という感覚は、共有する体験や、互いについての知識の多寡にでなく、むしろ交わし合う視線、開き合う仕草の質にこそ、実は依っているのだろう。同じ地に生きる者同士だけが許しあう、そのような視線や仕草こそ、念願のカメラを手にした村の青年角田が輝かしい物体であったカメラという箱に収集したものだった。金山の村の人々は、嬉々としてして箱に入りこみ、60余年の時をやすやすぐり抜け、親密な視線を交わし合う「今」をたずさえて、私の前にやってきていた。

1928年金山に生まれた角田勝之助は、10代から写真に興味を持つが、戦時中に注文したカメラが敗戦前後の混乱で村に届かず、実際に機材を手にしたのは1951年(昭和26年)だった(註1)。撮影を初めてすぐ、あるいはわずか数年の人が、これほどの写真をいきなり残しえた奇跡、不思議に、感嘆を覚えずにはいられない。

それから、角田が生まれ育った村に現在に至るまで住みつけ、村の人々を撮影し、数万枚というカットが残されてきたことを、「村の肖像」と題された角田のその初の写真展を企画した新潟大学の原田健一、榎本千賀子両氏に教えられた。原田が中心となって活動する「新潟大学地域映像アーカイブ」で

は、地域に「埋もれた」様々な映像を拾い集め、公開する試みを2008年から続けてきた。原田らが角田の写真と出会ったのも偶然だった。村の旧家出身の元同僚の、その実家に残された写真

**なじんていった集落の人々は、  
一人一人が違っていた。大きかった。  
誰にも<宇宙>があった。**

の調査で金山を訪ねたとき、村で写真を撮りつづける角田の存在を教えられる。角田の写真は、アーカイブの活動がそれまで目を向けてきたマスメディアに関わった写真家とも、家族の写真を中心に撮影されたプライベートフィルムとも違う性格のものだった。原田の表現を借りれば、カメラを手にして以降、角田は集落の「写真係」となった。進んで、時に求められて、家族以上にコミュニティの人々を被写体に撮影を続けた。写真は角田の手でプリントされ、村の人々に手渡されることはあっても、雑誌に投稿されたり、展覧会で発表されることはなかった(註2)。私が角田の写真に、写真の中の人々に会えたのは、角田自身の存在に加え、原田らの活動と、実際に展示の写真を選び、新たなプリントを制作し、展示に構成した榎本の行為があつてのことなのだった。

写真家未満という言葉を使う。仮に「写真家」を撮影し、プリントするだけでなく、自ら選び、配列し、不特定の人々に向けて展示、写真集などの形で「発表」する存在と規定するなら、角田勝之助は、角田勝之助である限りでは、写真家未満だった。自らアルバムを作り、村の人々にプリントを手渡していたという点では選び、配列し、発表もした。しかしそれらが開かれ、向けられた対象は自分自身や家族、村人という範囲に限定されていた。その点では地域映像アーカイブがやはり対象とするプライベートフィルムの場合に近い。そして去年、▶



「村の肖像Ⅱ・展」(新潟大学旭町学術資料展示館)より  
上左から:TK-P-003-009-30、TK-P-003-019-20、  
TK-P-003-046-22、TK-P-003-011-25



「村の肖像Ⅱ・展」(新潟大学旭町学術資料展示館)より 上左から:TK-P-003-022-09、TK-P-004-038-27、TK-P-003-068-11

- ▶ 会場で壁をぐるぐる回りながら、私がおぼろに感じたもうひとつのことは、その写真家未満から、たった今、まぎれもない「一人の写真家」が姿を現そうとしているという感触、予感だったのである。全貌をまだ現さないその写真家は、しかも、すでにして、ただならぬ気配をそなえているようだった。

新潟大学地域映像アーカイブは今年、再び榎本千賀子のセレクションと展示による、昭和30年代を中心とした角田の写真展「村の肖像Ⅱ・展」を開催した。それにあわせて砂丘館では昨年展示された写真をそのままギャラリーに展示した。その配列は私が主におこなったが、違う場所に、自分で並べ、見直す過程で、昭和20年代の写真について改めて強く印象づけられたのは、人々の表情ににじみ出た「晴れがましさ」だった。晴れがましさは、幸福感のひとつの形だ。自分が自分であることに、自分でないものの視線という光があてられて生じる、一種のハレーションだろう。同じ村人が持ち込んだ、カメラという新しい物体の前に立ち、「撮られる」晴れがましさ。そのハレーションの強さがただならない。角田の写真の中で人々は晴れがましくありながら、実にどこかくつろいでいて、そのことが、被写体となった人々が身を置く場所——人々とともにカメラに誘い込まれた山の空間を息づかせ、やわらかく、奥深いものになっている。牛腸茂雄の「Self and Others」の人々と見つめる牛腸との、偶然の邂逅ともいべき視線の一瞬の接触で、周囲の世界が息を吹き返していたのを思い出す。角田の写真では撮り、撮られる者の視線は、牛腸の場合よりもっと深く、互いに入りこみ、人間が生きる空間入りこみ、人間が生きる空間の広がりや奥行きという現象が、何によって生み出されるのかを示唆するようだ。

今回新たに展示された、後に続く角田の写真群では、角田の「写真係」としての対象の広がり、カメラの小型化による構図の変化、人々との関係にも変化が認められる一方、昭和

20年代の写真に認められたものの新たな展開も見える。9月14日に砂丘館で開かれたシンポジウムで、大日方欣一が自ら選んで映像で示した写真を通して語った、角田の写真の特質や、その後半に登壇した角田自身の語った言葉についても語りたけれども、紙数がない。

最後に触れておきたいのは、このようにして、姿を現しつつある「写真家」は、角田勝之助当人ではない者たちによって「創られる」面を必ず持つだろうということだ。「撮影する」という行為において、すでに村人たちが、その創造に加わっていたように、角田の写真に揺らされた私の言葉もまた、すでにして「写真家角田勝之助」の創造行為の一部となっている。そうしたスリリングで、興奮する、そして当然ながら未知の危険をも伴うであろう未完の行為の一過程にこうして関わり、際会でできたことを、こと角田勝之助に関する限り、私は誇らしく思わずにいられない。 ■

註1 2014年9月14日 シンポジウム「写真とコミュニティ—角田勝之助の写真をめぐって」での角田勝之助氏の発言による。

註2 同上



## 村の肖像Ⅰ & Ⅱ・展

2014年9月2日(火) - 23日(火)

「村の肖像Ⅰ」砂丘館

9月3日(水) - 21日(日)

「村の肖像Ⅱ」新潟大学旭町学術資料展示館